



さまざまな夢を抱いて
アラスカにやって来たぼくは、
まるでそのひとつひとつを
消化していくかのように旅を始めました。
アラスカという自地図の上に、
自分自身の地図を
描いてゆかなければならなかったのです。

自然、動物、人々を愛した



星野道夫
ほしのみちお
1952年9月、市川市生まれ。
慶應義塾大学経済学部卒。
1978年、アラスカ大学野生動物管理学部留学。
以後アラスカで野生動物や自然、
人々の暮らしを写真と文章で記録。
1996年8月、ロシア・カムチャツカ半島
クリル湖畔で逝去。享年43歳。

Photographer
Michio
Hoshino



アラスカの自然を旅していると、
たとえ出合わなくても、いつもどこかにクマの存在を意識する。
今の世の中でそれは何と贅沢なことなのだろう。
クマの存在が、人間が忘れていた生物としての緊張感を
呼び起こしてくれるからだ。
もしこの土地からクマが消え、
野営の夜、何も怖れずに眠ることができたなら、
それは何とつまらぬ自然なのだろう。



子どもの頃に見た風景が
ずっと心の中に残ることがある。
いつか大人になり、さまざまな人生の岐路に立った時、
人の言葉ではなく、いつか見た風景に励まされたり
勇気を与えられたりすることが
きっとあるような気がする。

写真家

写真提供:星野道夫事務所
5~7ページの写真に添えた文章は「旅をする木」
星野道夫著・文藝春秋刊より抜粋しました。

いままたよみがえるたくさんの勇気と感動の世界

なぐりつけられるような寒気、マイナス50度の世界。
すべてが凍りつくような寒さの中でさえ、ほのぼのとした暖かさを感じる写真の数々。
星野道夫さんがフレームに切り取った写真は、過酷な大自然、
そしてその中で生きとし生けるものすべてを、優しく見守り続けた証しです。
不慮の事故で亡くなって7年という歳月が流れましたが、
写真集のページをめくるたびに、いつも新鮮な感動と新たな驚きの発見があります。
いつまでも素敵で感動を与え続けてくれる星野道夫さんの写真展が
初めて市民の手によって、市川市で開かれることになりました。
星野道夫さんが愛してやまないアラスカの自然が、いままた私たちの前に新たな感動でよみがえります。



星野道夫